

森林と水と未来を考え、 未来への贈り物をつくってきた10年

NPO 法人 森の会 (群馬県)

**首都圏を潤す利根川の水を
育む母なる森づくり運動**

平成十年に群馬県で開催された第
四九回全国植樹祭を契機に、一過性
のイベントに終わらせたくないと考
えた人たちがいました。植樹祭の理
念である森林と人間の未来を考え、
未来に引き継いでいくため、幅広い
県民運動に発展させることを目的と
して、平成九年十二月、ボランティア
アグループ森の会が誕生し、翌年九
月、NPO法人として認可を受けま
した。

植樹祭では、森の会副理事長の俵
萌子さんが、自作の詩「母なる森
群馬の森」に会のメッセージを込め
て発表しました。

群馬県は首都圏二八〇〇万人の命
の水、利根川の水源です。森の会は、
水源の森をつくり、森林に育まれる
一滴の水を大切に、豊かな清
流・利根川をつくるため、流域住民
とネットワークをつくり、森林と水
と環境の保全を行うべく「水源の森
整備事業」、「人材育成事業」、「森の
文化事業」を行い、さらにはブラジ
ルとの交流のなかで続いている「ア
マゾン・地球環境保全事業」など多



あかぎ親しみの森での整備の様子

様な運動を展開しています。

鮮やかな

ヤマツツジの大群落が復活

なかでも、森の会発足当初から取り組んできた「あかぎ親しみの森」整備は中核事業であり、息の長い活動で確実に成果をあげています。森の会は、平成十年に、赤城山麓に広がる広葉樹の国有林四五ヘクタールを赤城村（現渋川市）と共同で関東森林管理局と協定を締結し、市民参加の水源の森づくりを始めました。「当時国有林・県有林がボランティア

アの活動の場として開放されることはほとんどなく、全国でも初めての例だったと思います」

森の会の活動に発足当初から携わってきた前橋市の大塚克巳副市長は、当時を振り返って、そう話してくれました。

「整備作業は年二回、枯損木の伐採、除・間伐などを関東森林管理局、渋川市と共同で実施します。初めころは三五〇人ぐらいでしたね。参加するボランティアのなかには、千葉県から朝三時に出てきたという人もいました。今は一〇〇人ぐらい。一

区画を責任もって整備する森林ボランティアグループもあり、一〇年間かかってようやく整備を終えました。これからは維持していく活動を行っていきます」

整備活動によって、森に埋もれていたヤマツツジの大群落が鮮やかに復活しました。ツルや木の実に小物をつくるなど、楽しいこともいろいろです。

「整備作業は大変ですが、森林の未来のためには息長く続けていく必要があります。若い人たちにはぜひ担い手となってほしいと思います。森

の会は、地球の緑を守り増やすため、森林や緑づくりに関する広範囲な知識や技術を育てる人材育成にも力を入れていきます」

と大塚さん。森の会は輝き続けます。



上：みんなで助け合いながら整備

中：昨年、「あかぎ親しみの森」での整備 10 周年を記念して植樹

下：植樹祭の会場になった公園「21 世紀の森」に植えた苗木の周りを整備

data

〒 371-0846

群馬県前橋市元総社町 73-5

☎027-255-3450

<http://www5.wind.ne.jp/morinokai/>